

鈴木重家物語の担い手とその展開

——『義経記』成立考序説——

内田 源

一 はじめに

『義経記』とは、源義経を主人公に据えた一つの軍記物語である。しかし、それは義経の生涯を順にすべて記した一代記ではない。八巻から成る『義経記』は、四巻「頼朝義経対面の事」を境に大きく二つに分けることができ、前半部分は義経奥州下りをはじめ、義経が英雄へと力を得ていく様が描かれる。それと対照的に後半部分は義経都落ちに始まる義経が没落していく様が描かれる。義経が平家との戦いで活躍したという話は『義経記』では全く存在しない。

そうした特殊な物語が展開されている背景に、『義経記』の成立過程を見ることが出来る。『義経記』は一言に「義経伝承」と呼ばれるたくさんの民間説話に取り込まれて成立していった。巻一の義経元服譚、巻二の兵法習得譚、巻四の弁慶との出会い譚など、

様々な義経伝承が集められたものが『義経記』なのである。

このような考察を初めて唱えたのは柳田國男である¹⁾。先行研究において、『義経記』の成立は室町時代だとする島津久基の説²⁾が有力なものとなっているが、それはあくまでも読み物としての『義経記』であり、語り物としての『義経記』の成立に関して指摘しているのが柳田國男なのである。柳田國男は『義経記』も『平家物語』と同じように盲僧によって口承文芸の形として語り継がれたという。義経伝承の集合体が『義経記』であり、その生成には土地にまつわる義経伝承やその当時の有力豪族の姿などが関わっていると指摘した。この考え方を踏襲して角川源義³⁾、岡見正雄⁴⁾、梶原正昭⁵⁾らが『義経記』の部分的な語りの担い手論として研究を展開している。

こうして『義経記』の成立に関する研究は、『義経記』自体の成立ではなく、『義経記』に組み込まれているそれぞれの義経伝承の成立に関する研究に移行されていった。それによって、『義経記』の部分的な担い手については明らかにようになってきている。しかし、

まだ統合的に明らかにすることはできていない。様々な担い手によって語られてきた物語を、『義経記』という軍記物語にまとめあげ、成立させたのはどのような人々だったのだろうか。

本稿は、そうした『義経記』成立考へ続くものとして、『義経記』巻八で語られる鈴木重家物語に着目し、その担い手と展開を明らかにすることを目的としたものである。義経の郎等の一人であり、義経最期の衣川合戦で討死を果たした鈴木重家という人物を取り上げる。『義経記』における特殊な扱われ方、『義経記』の外側にある鈴木重家語りを通して、鈴木重家物語の存在を示し、その物語をどのような意図でどのような人々が語ったかを指摘する。

二 『義経記』における鈴木重家物語

『義経記』において、鈴木重家は高館にて最期の合戦に備える義経のもとを訪れる義経郎等の一人である。頼朝より所領を賜る身でありながら義経を想い、高館へ赴いたと重家は語る。義経との主従関係の強さ、絆の深さを感じさせる男である。鈴木重家には亀井重清という弟が存在し、兄弟共に義経に仕えた。衣川合戦において、鈴木重家は合戦に臨んだ義経郎等のうち最初に自害し、弟亀井重清は兄に続いて自害している。兄弟同じ場所において自害したとする語りから、鈴木重家は兄弟の絆も深い男であったとされる。二人の自害の様子を語る部分は次の通りである。

斯、りけるとところに鈴木三郎、照井太郎と組まんと、「和君は誰ぞ」「御内の侍に照井太郎高治」「さて和君が主こそ鎌倉殿の郎等よ。和君が主の祖父清衡後三年の戦の時、郎等たりけるとこそ聞け、その子に武衡、その子に秀衡、その子に泰衡、されば我等が殿には五代の相傳の郎等ぞかし。重家は鎌倉殿には重代の侍なり。されば重家が爲には合はぬ敵なり。されども弓矢取る身は逢ふ敵、おもしろし、泰衡が内に恥ある者とこそ聞け。それが恥ある武士に後見する事やある。穢しや、止まれ」と言はれて返し合せ、右の肩切られて、引きて退く。鈴木すでに弓手に二騎、右手に三騎切り伏せ、七八騎に手負ほせて、わが身も痛手負ひ、「亀井六郎犬死すな。重家は今ほ斯うぞ」とこれを最期の言葉にて、腹搔切つて伏しにけり。

「紀伊国鈴木を出でしより、命をば君に奉る。今思はず一所にて死し候はんこそ嬉しく候へ。死出の山にては必ず待ち給へ」とて、鎧の草摺かなぐり捨てて、「音にも聞くらん、目にも見よ、鈴木三郎が弟に亀井六郎生年廿三、弓矢の手並日頃人に知られたれども、東の方の奴原はいまだ知らじ。初めて物見せん」と言ひも果てず、大勢の中へ割つて入り、弓手にあひつけ、右手に攻めつけ、切りけるに、面を向ふる者ぞなき。敵三騎打取り、六騎に手を負せて、わが身も大事の傷敷多負ひければ、鎧の上帯押しくつるげ、腹搔切つて、兄の伏したるところに同じ枕に伏しにけり。

『義経記』巻八「衣河合戦の事」⁽⁶⁾

衣川合戦において義経と最期を共にしていく鈴木重家と亀井重清。義経の最期を飾るかにように華々しく語られる二人の武勇と自害の様子は、さぞ勇猛な強者として義経に長くつき従い、絆の深い忠臣であったことを思い起こさせるだろう。『義経記』巻八までにおいて、二人の活躍は多く語られてきたと考へても不思議ではない。しかし、鈴木重家はこの『義経記』巻八までに登場することはなく、その名が全く語られていないのである。

二一 『義経記』の不自然さ

『義経記』巻八までに、弟亀井重清は義経郎等としてその名を度々登場させている。『義経記』巻四では土佐勢と戦う郎等と共にその武勇が語られ、義経北国落ちが語られる『義経記』巻七でもその名が登場している。亀井重清は義経の没落期が語られる巻四以降において義経と行動を共にし、苦難を共に過ごした郎等であった。

そのような亀井重清とは違い、鈴木重家は衣川合戦直前までに一度も『義経記』に現れない。兵法を習得したり弁慶と出会ったりして義経が英雄化していく巻四まで、また、頼朝との不仲から都を離れ、奥州へと辿り着くまでを描く巻四から巻七まで、どこにも鈴木重家の姿は見当たらない。つまり、『義経記』の聞き手に

とつて突然現れる人物でいまひとつつかめない男なのである。

『義経記』で鈴木重家の高館来訪が語られる「鈴木三郎重家高館へ参る事」の概要は次の通りである。

衣川合戦を前に重家は義経と対面を果たす。まず義経からどうしてここまで来たのか尋ねられる。その発言の中には鈴木重家が頼朝から所領をもらっている身分なのにどうしてという気持ち込み込められている。それに対し、鈴木重家は昔主従関係を結んだその絆を想い、義経と死出の旅路を共にすると述べて、義経は涙するのであった。その後、鈴木重家が討死の際に具足の善悪を言われるのは避けたいと申すことによつて義経が鎧を鈴木重家に渡し、鈴木重家が身につけていた腹巻は弟の亀井六郎に渡されることとなった。

このような登場場面を経て合戦での自害が語られる鈴木重家。義経とのつながりを持ち、その絆によつて高館を訪れ、義経と共に最期を遂げる。物語の筋は通っており、その点に関しては何も問題は無い。しかし、その語られ方は聞き手に不自然さを抱かせる。義経との出合いを語る場面がない。強い主従関係、絆を作ったとする話がない。そのような鈴木重家がどうしてこの『義経記』終盤に登場し、語られるのだろうか。どうして衣川合戦ですぐさま死んでいく者の高館訪問、自害の様子がわざわざ語られるのだろうか。ここに『義経記』は不自然さを示すのである。

この不自然さを聞き手が感じず、当然のものとして受け取つたとするには、ある一つの仮説が立てられる。『義経記』の外側に鈴

木重家物語なるものがあり、『義経記』はそれを部分的に採用したというものである。出会い譚も主従関係成立譚もない、『義経記』の鈴木重家語りであるが、それは『義経記』にはないものの、『義経記』の外側で鈴木重家物語が語られ、それを聞き手が知っているからこそ、不自然な『義経記』が何の問題のない一つの作品として存在できたのである。『義経記』は鈴木重家が高館を訪れる語りを組み込み、衣川合戦での死に語りを採用した。しかし、それは鈴木重家物語の全体を採用したわけではない。鈴木重家物語から部分的に採用された。このように捉え、『義経記』成立以前に鈴木重家物語なるものがあつたと考えるべきではないだろうか。

二二 『吾妻鏡』『平家物語』に見る鈴木重家物語

考察を進めるためには、『義経記』以外における鈴木重家物語の姿を見つければならない。ここで、『義経記』を離れ、『吾妻鏡』、『平家物語』から鈴木重家物語の足跡を探し求めていく。

『吾妻鏡』において、義経と郎等の名が共に記されている箇所は、頼朝との不仲から義経が西海に逃れていく場面で存在する。

前備前守行家。伊豫守義経等赴西海。先進使者於仙洞。申云。爲遁鎌倉謹責。零落鎮西。寂後雖可參拜。行粧異躰之間。已以首途云々。前中將時實。侍従良成。伊豆右衛門尉有綱。堀弥太郎景光。佐藤四郎兵衛尉忠信。伊勢三郎能盛。片岡八

郎弘経。弁慶法師已下相従。彼此之勢二百騎歟云々。

(『吾妻鏡』文治元年十一月三日条²⁾)

このように、佐藤忠信、伊勢三郎らの名前が一緒に落ち行く者として記されている。その他には、従者の名が義経と共に記されることはなく、佐藤忠信が都にて誅される記述がある程度となっている。鈴木重家の名はそこに現れない。『吾妻鏡』全体を通して鈴木重家の名は一切出てこないのである。これは日記など他書を調べても同じ結果となる。九条兼実が記した日記『玉葉』³⁾、慈円が記した『愚管抄』⁴⁾に目を通して鈴木重家の名は一つも出てこない。

『義経記』において、登場せずとも何の問題もなさそうな中、わざわざ義経と共に死んでいく鈴木重家。歴史書において名が列挙されているために『義経記』でしぶしぶ登場させられているようなふしすら感じさせる男である。しかし、そうではない。鈴木重家は実在したのかさえ定かではないのであつた。

『平家物語』は『義経記』成立以前の軍記物語であり、源平の戦いを語っている。義経の活躍振りももちろんそこには含まれており、義経と共に活躍した従者たちの名も存在する。『平家物語』では諸本間で違いはあるものの鈴木重家の名前を見つけることができる⁵⁾。

初めて登場するのは、源氏勢が平家追討軍として揃って平家のいる福原を攻めるべく、三草山に向かう場面である。この場面で

は、百二十句本と源平盛衰記のみの登場となつている。

からめての大しやうぐん九郎よしつねにあひしたがふ人々、おほちの太郎これよし、やすだの三郎よしさだ、(中略御ざうしのてらう) とうには、すゝきの三郎しげいゑ、かめ井の六郎しげきよ、源八ひろつな、くま井太郎、えだのげんざう、あふしうのさとう三郎つぎのぶ、同四郎たゞのぶ、いせの三郎よしもり、むさしぼうべんけいをさきとして、つがうそのせい一まんよき、どう日どうじにみやこをたつて、たんばぢにかゝつて、二日ぢを一日にうつて、その日はりまとたんばとのさかひなるみくさ山のひがしの山ぐちをのばらにこそつき給へ。

『平家物語』百二十句本 卷九

次に、土佐坊昌俊が義経のもとに夜討をかけたくる場面である。夜討をひとまず防ぎ、従者を呼び寄せるときに、佐藤忠信や伊勢三郎などと共に登場する。この場面においては、百二十句本、中院本、南都本において鈴木重家の名が見られる。

うちのりて、天ぢくしんだんはしらず、よしつねをてごめにしつべきものはおぼえぬ物をとなのりさげんでかけ給へば、つゞくものには、すゞきの三郎しげいゑ、かめ井の六郎しげつね、さとう四郎びやうへたゞのぶ、いせの三郎よしもり、

源八びやうゑひろつな、くまる太郎、えだのげんざういげのつはもの廿よき、おめひてかく。しやうそんがせい五十き、さんにかけてやぶられて、のこりすくなくうたれけり。

『平家物語』百二十句本 卷十二「ほりかは夜うち」

鈴木重家は『平家物語』において二度登場する。しかし、確認した通りその登場の仕方は、名を語るのみとなつている。三草山合戦で活躍した話もなければ、土佐夜討において活躍した話もない。武勇譚は存在せず、『義経記』に描かれているような絆の強さも見ることはできない。

『吾妻鏡』には登場せず、『平家物語』には登場する。したがつて、歴史書において登場しているからこそ、『平家物語』で登場しているわけではない。この『平家物語』での登場には、鈴木重家物語の存在が窺えよう。その物語には、義経と共に戦つたとする語りがあり、その語りが『平家物語』に取り込まれたのではなからうか。『平家物語』に見る鈴木重家の登場は、軍記物語における鈴木重家物語の萌芽とも言うべき形だと考える。

三 語られなかつた鈴木重家物語

『義経記』において掴めなかつた鈴木重家物語の全体像は、歴史書や軍記物語を離れた謡曲や幸若舞曲の世界から見つけることができる。語られなかつた鈴木重家物語には、母との別れや捕縛

後の頼朝との対面などが存在する。

三十一 謡曲、幸若舞曲などに見る鈴木重家

六つの作品において、鈴木重家物語の姿が存在する。それぞれの概要と特徴は次の通りである。

I 謡曲「語鈴木」⁽¹⁾

大きく分けて二つの話が語られ、前半部分は鈴木重家とその老母の別離譚、後半部分は鈴木重家と頼朝との口論譚となつている。老母との別離譚は鈴木家の本拠地である紀州で行われる。義経に関する話を、熊野詣を行う道者から聞いた鈴木重家は、老母との別れを決意し、老母の留めようとする想いを抑えるべく、例え話を用いて説得する。頼朝との口論譚は奥州へ向かう途中に捕縛され、鎌倉の頼朝の前へと連れられたところから始まる。頼朝の問いかけに対して、鈴木重家は義経に非がないことを十分に説き、頼朝を論破する。そして、「剛の者」とまで頼朝に称賛される賢者振りを示すのであった。

武勇ではなく、賢しき者として相手を言い負かすことで剛の者と称賛される点の特徴である。他の義経郎等も武勇だけが語られているわけではない。弁慶も北国下りて義経に手を出すことで関所を越える賢者振りを見せている。強者の語りの形として、賢者

の一面を語ることは大いに存在し、この「語鈴木」においてもその形が見てとれる。また、老母の登場は大きな特徴だと言える。母との別れという悲しき話には、その物語を語る担い手の姿が垣間見られる。

II 謡曲「追熊鈴木」⁽²⁾

奥州の義経のもとへと向かう途中に捕縛され、頼朝のいる鎌倉へと連れて行かれる作品が他にある中、この作品は独自のものとなつている。その捕縛される場面が語られている作品である。短い作品ながらも鈴木重家の武勇を語るものとして貴重であると言える。「むさし野に、秋の夜出づる月弓の、遣るまじとてぞ追うて行く」という一声から始まるが、舞台は武蔵野となつている。奥州の義経のもとへと向かう途中ということだろう。大間経正という人物と従者が鈴木重家と戦いを始め、小太刀で応戦するが捕まり、鎌倉へと連れていかれるのであった。本作品は武勇を示すという点の特徴だと言える。義経郎等は「一騎當千」の力を持つと言われ、その言葉に劣らない力がここでは語られている。

III 幸若舞曲「高館」⁽³⁾

義経の最期である衣川合戦の始まりから終わりを描いたものであり、その中で鈴木重家は弁慶、亀井重清と同じように中心人物

として語られる。大きく分けて二つの場面に分けることができ、前半部分は鈴木重家の高館訪問と腹巻譲渡、後半部分は衣川合戦譚となつてゐる。『義経記』と同じ場面を取り扱うものであるが、その内容はこちらのほうが豊富である。腹巻譲渡には熊野本地譚が含まれていることがこの作品の大きな特徴だと言える。合戦の様子では、亀井重清、鈴木重家と順に弓矢を射て活躍する話がある。「高館」では、鈴木重家は自身の始祖が熊野権現の第一の臣下、能見大臣重高であるとして、鈴木家の出自を語る。ここに熊野鈴木家を称えようとする性格を見ることが出来る。「高館」は明らかに鈴木兄弟が主人公に据えられていると言えるだろう。ここに『義経記』との決定的な違いがある。『義経記』では、死にゆく義経郎等の一人として描かれる鈴木重家が、幸若舞曲「高館」では弁慶に並ぶ主役として描かれている。

IV 狂言「生捕鈴木」⁽¹⁴⁾

「語鈴木」の後半部分と同じようなものとなつてゐる。生け捕られた鈴木重家が頼朝の前に引き出され、頼朝の義経に対する非難を述べることでその場を逃れていく。狂言らしい演出として、頼朝が鈴木を鱸と間違える話が冒頭にある。重家の故郷の地に藤代が明示されている点は注目される。

V 『異本義経記』「鈴木重家」⁽¹⁵⁾

『異本義経記』は、『義経記』とは全く別の作品である。『義経記』にはない異伝や異説が多く収められている。鈴木重家が捕縛されることから頼朝との口論で言い負かすところまでとなつてゐる。捕縛される部分は「追熊鈴木」と、口論の部分では「語鈴木」、「生捕鈴木」と同じように描かれている。本作品では人物や場面設定がきちんとなされており、語りにも歴史書などに見られる人々の存在を踏まえた作品だと言える。

VI 「聞書 鈴木三郎重家物語」⁽¹⁶⁾

謡曲「語鈴木」と同様のものとなり、構成もほぼ一致している。細かな語句の違いがあるのみである。細かな違いのみということから、元となつた語りは同じくし、書写段階において違いが生まれたと考えられる。

以上六つの作品を確認していったが、鈴木重家の伝承としては次に挙げるものが存在することとわかる。

- ① 奥州へと向かうために母と別れる話
- ② 奥州へと向かう途中において戦い、生け捕られる話
- ③ 頼朝の非を説き、捕らわれの身から解放される話
- ④ 高館へ辿り着く話
- ⑤ 衣川合戦にて兄弟共に自害していく話

こうして『義経記』を離れたところに、鈴木重家に関する伝承があつた。奥州へ向かう前の場面、途中の場面、後の場面においてそれぞれ、鈴木重家は語られたのである。一つひとつの伝承が作品として取り扱われているのだが、このようにそれらを並べてみるとある一つの形が見えてくる。各伝承をつなげていくと、あたかも鈴木重家の一代記のようなものが浮かびあがってくるのである。推測に過ぎないが、鈴木重家という一人の人物を中心に置き、その活躍を語る物語、一つの「鈴木重家物語」なるものが存在したのだと考える。

作品となつているものはないが、義経と鈴木重家の出会いについての伝承も存在する。伝承誕生の時代が判明しないので、江戸期以降に創り上げられていったことも注意しなければならないが、鈴木重家物語の存在につながるものだと捉える。藤白神社境内にある鈴木屋敷にはその伝承が存在している。義経が牛若丸と呼ばれた頃、京都の東光坊で鈴木重善と君臣の誼を結び、熊野往還には常に鈴木家に立ち寄り、鈴木三郎重家、亀井六郎重清と山野に遊んだと伝わり、屋敷前には狩猟の出かけの際に弓を立てたという松の木が「義経弓立松」として残されている。また、『紀伊国名所図会』には鈴木木の館において兄弟の誓いを結んだという記述も見られる。

○舊家 地士 鈴木三郎

鈴木氏は熊野三舊家の其一なり（略）義経の未た舍那王といひ

し時熊野詣して鈴木木の館に逗留す此時義経扈從の土佐々木秀義六男亀井六郎重清をして重國の一子三郎重家と兄弟の誓を結はしめ兩人をして取て重家は家に留まり父を養ひ重清は義経に軍中に従はしむ（略）

（『紀伊国名所図会』¹⁷）

『義経記』において鈴木重家は、義経の最期に際して突然登場し、共に死んでいく不自然さを持つ。しかし、鈴木重家物語の存在が不自然なままで問題ないようにした。義経との出会いから自害までを描く鈴木重家物語は、『義経記』と同じように、一つの語り物として人々に語られていたのであろう。

三―二 佐藤忠信物語、静物語との構造比較

次の表は、ここまでに確認してきた鈴木重家語りを並べて浮かび上がった、鈴木重家物語の物語内容とその流れである。

① 義経が幼少期に鈴木木の館を訪れ、主従関係を築いた。

（『紀伊国名所図会』）

② 平家追討軍の一人として義経と共に戦う。

（『平家物語』）

③ 都にて義経と別れるが、その後また義経が落ちて行った奥州に向かうために母を説得し、涙の別れをする。

〈『語鈴木』、「聞書 鈴木三郎重家物語」〉

④ 高館へ向かう途次に追手と戦い、生け捕られる。

〈『追熊鈴木』、「異本義経記」〉

⑤ 生け捕られて鎌倉へ連行され、そこで頼朝と対話をした後、隙を見て逃げて再び義経のもとへと向かう。

〈『語鈴木』、「生捕鈴木』、「異本義経記』、「聞書 鈴木三郎重家物語」〉

⑥ 高館へ辿り着く。義経から鎧を賜り、鈴木家に代々伝わる腹巻を弟の亀井重清に譲り渡す。〈『高館』〉

⑦ 衣川合戦において自害を果たす。〈『義経記』、「高館』〉

『義経記』だけでは突然現れ、すぐさま死んでいく不可解な男が描かれる。しかし、それはあくまで物語の一部だった。『義経記』の外側では、優れた義経郎等の一人として、苦難や活躍を語る一つの物語が存在したのである。

鈴木重家物語には、「①主従間の強い絆」、「②母との別れ」、「③

捕縛、頼朝との対面」、「④義経の最期で奮戦」という四つの要素が組み込まれている。これを『義経記』巻五で見られる佐藤忠信物語、静物語と比較すると、類似、関連する部分があった。佐藤忠信物語と静物語の概要は次の通りである¹³⁾。

【佐藤忠信物語】

① 義経につき従い頼朝のもとへ向かう。

〈『吾妻鏡』、「義経記」〉

② 義経の郎等として平家討伐に参与する。〈『平家物語』〉

③ 義経の没落における戦いに活躍する。

④ 義経と吉野山にて別れる。

⑤ 吉野山にて横川覚範らと戦い、都に逃げのびる。

〈『謡曲』「忠信」、「躑躅岡」〉

⑥ 都に忍んでいたが、女の密告によつて襲撃を受ける

〈『しばん忠信』〉

⑦ 六條堀川の義経の館にて、自害を果たす。

⑧ 忠信の首が鎌倉に届けられる。〈『義経記』〉

⑦ 義経が佐藤兄弟の母を前に弔いを行った。

【静物語】

① 義経とともに西国落ちを図り、大物浦にて義経の妾が京に帰されていくなか、一人義経について吉野山へと向かう。

② 吉野山にて、義経と涙の別れをする。

③ 供の者に逃げられ、一人吉野山の蔵王権現社に辿りつく。法楽の歌を歌うことで正体が明らかになり、若大衆に捕まるが、翌日北白川へ送られる。〈『義経記』〉

④ 鎌倉に呼ばれ、義経の行方を尋問される。〈『吾妻鏡』〉

⑤ 義経の子を身ごもっていると判明し、鎌倉に召される。鎌倉の堀藤次家にてお産をし、男子だったために殺害され、悲しみの中、都へ帰った。

⑥ 再び鎌倉へ召され、若宮八幡宮にて頼朝の前で舞を披露する。

⑦ 義経への想いを持ち続け、母にも知らせず出家し、翌年には往生を遂げた。〈『義経記』〉

⑧ 静の亡霊が現れ、義経への想いを歌う。

〈謡曲「吉野静」「二人静」〉

佐藤忠信物語とは「①主従間の強い絆」「②母との別れ」「③捕縛・頼朝との対面」という部分で類似・関連性を持つ。その中でも、どちらも物語中に母の存在が見られる点は重要だと言えよう。また、静物語とは「①主従間の強い絆」「③捕縛・頼朝との対面」という部分でつながる。こちらはどちらも物語中に鎌倉を訪れている点が注目される。

構造比較を行うことで、鈴木重家物語が両物語の影響を受けて成長していったことが窺える。『義経記』における各物語の類似・関連性に着目することは、『義経記』成立考を進める上で非常に重要なアプローチだと考える。

四 物語の管理者、二つの在地性

鈴木重家物語は、謡曲や幸若舞曲など、『義経記』の外側において展開を見せる。その展開の背景に、『平家物語』、『義経記』とい

つた語り物文芸には採用されないものの、水面下において鈴木重家物語が、何らかの意図をもって特定の人々によって語られていたと稿者は考える。では、ある特定の人々とはいったいどのような人々なのだろうか。鈴木重家物語に関する主な先行研究は、角川源義^①、佐藤隆^②、小林健二^③によってなされている。

角川源義は、「平泉にいたる天台熊野修験」の存在を指摘する。幸若舞曲『高館』、鈴木兄弟の描写がより詳しい赤木文庫本『義経物語』を鈴木党の「家の文学」だと指摘し、鈴木重家物語は熊野語部が管理していただろうとする。そして、毛越寺の鎮守社でもある新熊野社の別当が平泉の地には存在し、別当をはじめとする天台熊野修験が奥州において「義経最期」の語り手となったのは当然だと論じた。鈴木党の「家の文学」は、彼らが熊野語りという要素を強めるために用いられたというのである。

佐藤隆は、「熊野山伏」が語り歩いたのではないかと述べる。幸若舞曲『高館』と『義経記』は同じ原説話から展開されたとし、その上で、鈴木氏の活躍が強調されているのは、熊野宣伝のためではないかと指摘する。熊野本地譚が語られる鈴木重家物語を熊野山伏が宣伝のために語った可能性を論じている。

小林健二は、担い手に関してあまり踏み込んで論じてはいない。『紀伊統風土記』に収められる鈴木家伝来の重家の手紙を鈴木家の宣伝とし、その上で、『鈴木家系譜』からアプローチして論じていった小林健二は、鈴木重家物語を、鈴木重家を英雄に仕立てるための伝承だと考える。そして、能「鈴木」や「平家物語」など

での重家の扱われ方、鈴木重家の人物像が『義経記』や幸若舞曲などの物語・語り物の世界で劇的に増幅していくところを見て、「享受者の興味の赴くままにいろいろと増幅して語られていった」と述べるにとどまっている。

三者は共通して、鈴木重家の活躍は鈴木家によって語られたものであり、ひいては熊野信仰を広める為の語りであると指摘する。この点に関しては筆者も同意見である。鈴木重家が義経との強い絆を持って奥州までわざわざ訪れる、義経最期に際して兄弟ともに自害を果たす、という内容の物語は、鈴木家伝承として鈴木家に代々語られて不思議ではない。また、熊野を支配する豪族である鈴木家の武勇を語ることは、熊野信仰圏に属する者たちにとっても親しみやすいものとなるに違いない。そうしたことから、「熊野の宣伝」として鈴木重家物語が存在し、角川源義や佐藤隆が言うように、「平泉にいたる天台熊野修験」、「熊野山伏」によって語られたという点も間違いではないだろう。

しかし、この三者の共通意見、鈴木家・熊野の宣伝のための鈴木重家物語という捉え方には、追究するべき余地が残されている。それは、熊野の宣伝のために、なぜ鈴木重家が語られなければならないのかという点である。熊野語りをより強めるために鈴木党の「家の文学」が語られたと角川源義はいう。熊野なら弁慶でもよかつたはずである。なぜ鈴木重家がこうして語られたのであろうか。そこには鈴木家がこの時代どのような位置に存在していたのかが関わってくる。熊野、熊野信仰における鈴木家の位置

は大変重要であつた。この点を論じること、鈴木重家物語の担い手の姿をより鮮明にしていく。そして、新たに見えてくる担い手の可能性を示してみよう。

四——藤白鈴木家

鈴木重家は藤白鈴木家の末裔である。自らの家系に当たたる人物の物語を、その家の人々が語ることは容易に想像できよう。しかし、それだけの理由ではなかつた。藤白鈴木家は熊野信仰と大きく関わりを持つ。この点を明確に示し、鈴木重家物語が語られたであろう時代に藤白鈴木家がどのような立場にあつたのかを指摘する。そして、その上で自分たち藤白鈴木家の末裔を自ら語り手に位置づけようとしている『鈴木家系譜』に着目する。

「熊野山略記」には鈴木家の始まりが伝えられている。

同御宇（孝明天皇）五十三年戊午、裸形上人於岩基隈北新御山奉崇十二所権現、是號新宮、垂跡始権現乘龍蹄、新宮鶴原大高明神前、十二本榎本降臨、先千尾峯立以奉幣司被召権現氏人、則漢司符將軍嫡子眞俊忝先奉勸請権現於榎本、二男基成進猪子二白圓餅、三男基行爲御馬草進稻、此三人於如次號、榎本宇井黨鈴木家

〔熊野山略記〕⁽²¹⁾

ときの漢の司符將軍の嫡子眞俊が十二所権現を勸請したことから熊野三大家は誕生し、三男基行が稻を奉じたことから穂積（鈴木）の姓を賜つたとされる。『寛政重修諸家譜』⁽²²⁾においても同様の内容を見ることが出来る。

『紀伊統風土記』新宮條「熊野別當代々次第」に記載されている「參河國長存寺縁起」には、次のような記述が見られる。

實方奥州に流され 勅免なくして薨し給ふ其子孫多く世捨人になる 堀河院の御宇に實方五代の孫教眞といへる僧諸国修行し紀州熊野山に籠りたる折節其時の 仙洞白河院熊野へ御幸ましまして此山に別當ありやと御尋ある神職の棟梁鈴木罷出未不候と勅答申ければ則教眞を別當に居るとあり

〔紀伊統風土記〕所収「參河國長存寺縁起」⁽²³⁾

神職の棟梁として鈴木家は力を持つていたとされる。この他にも「宇井鈴木の二氏は古くより新宮に多く今の神官の祖も是等より分れたる」と『紀伊統風土記』は記し、熊野の豪族として鈴木家は存在し、その力は熊野三大家と言われる如く、大きなものだったと言えよう。

そのような鈴木家は藤白に拠点を移していく。藤白への移住に關しての史料は次の通りである。

○舊家 地士 鈴木三郎

鈴木氏は熊野三舊家の其一なり此地古熊野神領となり鈴木の一族地頭となりて此地に移りしならん鈴木三郎重家其弟龜井六郎重清源義経に仕へて所々に軍功ありし事諸書に見えたり其家傳云鈴木三郎重國といふあり南方八莊司の旗頭にして同治郎重治或はいふ重國三男と世々藤白を領す所縁ありて源家に屬し義朝に近習す(略)重家打死の後治郎重治遺跡相續して代々藤代に居住す

〔紀伊統風土記〕

眞勝が男基隆、その男俊基、其男俊家、その男日向守基経、その男越中守範基、その男資基、其男基重、その男基平、其男庄司重包とし、其傳に、はじめ熊野邑に住し、のち藤白にうつり、代々この地の著姓たり。後世妹背、湯浅、貴志、玉貴、湯川、眞砂、安宅等の族あり。鈴木を合せて世にこれを熊野邑のあひだ八庄司の黨と稱す。重包その魁たり。長徳のころ出羽掾となる。長保年中出羽介維茂同郷の豪族藤四郎諸任と采地をあらそひ、諸任兵をひきゐて維茂が邸を襲ひうつ。このとき重包維茂に屬し、力戦して死す。

〔寛政重修諸家譜〕

重家
始相祖翁命ヨリ九十壹世之後胤、累世紀伊国海士郡藤白二神代ヨリ連綿ト居住、重家伊予守源義経卿ヨリ味方ニ頼レノ谷、八島ノ合戦ヲ初メ其外數度ノ軍功世ニ知ル処ナレバ茲ニ

略ス

〔鈴木家系譜〕²⁶⁾

このように、史料によつて違いも見られることから移住の時期をはつきりと示すことはできないが、平安末期には移つたと考えられよう。

藤白は熊野街道上に位置し、熊野九十九王子の一つである藤白王子社があつた。藤白王子社は切目、瀧尻、近露などの王子社と共に大きな王子社であり、五体王子社の一つである。熊野御幸の記録には次のように記されている。

於藤代王子、行里神樂、給白米、又給坑飯一具、和泉宿湯浅事家憲所送也、如法行之、於宝前信心殊凝、感応之甚也

〔吉記〕承安四年(一一七四年)九月二十五日条²⁷⁾

次參成戸王子。次入藤代宿。不及御所三町許北宅也窮屈平臥。
〔後鳥羽院熊野御幸記〕建仁元年(一一〇一年)十月八日条²⁸⁾

天晴。朝出立頗遅々間。已於王子御前有御經供養等云々。雖營參。白拍子之間。雜人多立隔無路。強不能參逐電。攀昇藤代坂。五躰王子有相撲等云々。

〔後鳥羽院熊野御幸記〕建仁元年(一一〇一年)十月九日条

大野坂・松代・菩提房・鳥居等王子参如常、直参藤代御宿、入御已餘一時云々、入夜夕御浴・御拜如常、国司御儲如例
〔『修明門院熊野御幸記』

承元四年（一一二〇年）四月二十四日条²⁹）

朝御浴・御拜・御禊、了出御、参御藤代王子、依五躰王子御先達已下有馴子舞、其外事一如例、

但御神楽、本社八女八人、唱人五人伺候、八女翻袖、里神楽如例、事了序官給祿、八女各絹一疋、唱人白布各一反、里神楽祿如例、

殲法僧廿口列居礼殿、供米各一斗、布一反、序分給之、

次自坂下有御歩、仍人々皆以前行、扨退雑人、峯漸近程儲御輿、為乘御也、次於当下有御禊、其儀如例、

〔『修明門院熊野御幸記』承元四年（一一二〇年）四月二十五

日条

このように御幸に赴いた者たちの宿泊地となり、また、里神楽もこの地で奉納された。熊野詣の行程の上で、藤白という場所は単なる通過点ではなかった。京から熊野に向けて出発された長旅の疲れを癒すべき場所であり、熊野参詣において外すことのできない重要な場所だったのである。

古くには熊野参詣の第一の境界としてそこに大鳥居が建てられたとされる。『紀伊統風土記』藤白若一王子権現社の項では、熊野

一ノ鳥居と称されることについて、「熊野の盛なりし時此地に大鳥居を建て熊野一ノ鳥居とし遂に熊野神を遷し祭りしならん」と記す。『寛文記』に大鳥居が天文十八年（一五四九年）に損失したと見られるが、大鳥居が存在していたことから、当時の熊野参詣上の境界として重要な場所であったことは窺われるだろう。

「熊野三所権現金峯金剛蔵王降下之御事」、「熊野山略記」には藤白と十二所権現とのつながりが見られる。

紀州三上郡若浦藤代熊野十二所権現金船體示現

（『熊野三所権現金峯金剛蔵王降下之御事』³⁰）

同御代十二所権現金御船、紀伊国藤代着岸、楠上七十日御坐

（『熊野山略記』）

船に乗った十二所権現が藤白に現れると記されている。どちらの資料においても、藤白に示現した熊野権現は五体王子社が祀られていく切目、稲羽根、滝尻、発心門の地を通って本宮へと向かっていく。

藤白の少し南に位置する名草の浜に熊野権現が降り立ったことを歌う歌謡を『梁塵秘抄』に見つけることもできる。

熊野の権現は、名草の浜にこそ降り給へ、和歌の浦にし在しませば、歳はゆけども若王子

『梁塵秘抄』二五九番歌⁽¹⁾

熊野の権現は、名草の浜にぞ降り給ふ、海人の小舟に乗り給ひ慈悲の袖をぞ垂れ給ふ

『梁塵秘抄』四一三番歌

永池健二が指摘するように、この二首は明らかに熊野権現の藤白への示現を歌つたものだろう。平安末期の世において、藤白という地がすでに熊野信仰上、重要な地であつたことがここに示される。『神道集』『熊野権現の事』の中には、熊野権現が藤白から先に都へと飛行夜叉を遣わすという記述が見られる。あたかも藤白が熊野神域の端であり、そこから神域の外側に向けて遣わしたかのようなのである。

「永用録」には次のような記述も見られる。

當家之先者熊野三堂之一家榎本伊豫守重春之流裔也、其頃能良大臣重尊者、熊野神領之惣奉行として藤白□□二住入、

〔永用録〕⁽²⁾

鈴木家ではなく榎本家の者ではあるが、「熊野神領之惣奉行」として藤白に住むという。藤白の地は、熊野神領支配の有力な拠点であった。熊野神域の内側と外側を隔てる地。さらに、「熊野一之鳥居」が東にあつたことから、熊野に向けて、「一つ目の境界」と

して存在したと考えられる。藤白を越えると、藤白坂の厳しい道のりが始まっていく。そうした難路の出発点として、藤白は位置したのである。そのような重要な場所を管理する者は、やはり熊野信仰を管理する大きな力を持った者でなければならなかつただろう。鈴木家はその大役を果たすべく藤白に移り住んだのである。そのような藤白鈴木家において鈴木重家物語の主役、鈴木重家は重要な位置に存在している。それは、藤白の鈴木家文書として伝わる『鈴木家系譜』を見ると明らかである。

藤白に移住した鈴木家は代々受け継ぎ、在地の豪族として存在していた。その系譜において鈴木重家は重邦から代を受け継ぎ、次の重次へと続いていく。その後も追いかけて見ていくと、藤白鈴木家が伝える系譜において、鈴木重家は代々継承されていくその原点とも言える存在に位置づけられている。近世まで続いてきた藤白鈴木家の嫡流は重家から始まつたとする。『鈴木家系譜』は、藤白鈴木家が鈴木重家の直接の末孫によつて代々受け継がれてきたと示しているのである。始祖千翁命から代々伝わる血脈を継承していること、何世紀も藤白に拠点を置いた鈴木家の人物だということ、『鈴木家系譜』は意識させている。藤白鈴木家にとつて鈴木重家という人物をいかに重要に捉えているかが窺えよう。

次に挙げる鈴木重家の叔父である重善は、『鈴木家系譜』において最も記述内容が多い。そこには鈴木重家物語を語つたとする内容が見られる。この部分は、鈴木重家物語の担い手を論じていく上で、極めて重要なものとなろう。

重善

(略)

次郎後号七郎、甥重家、重清ノ跡を慕ヒ奥州へ趣ントスル所、三州矢作トイフ処迄行程ニシテ病ニ罹リ数日滞在スル内、高館落城シテ君モ空シク落サセ給ヒ、重家、重清死スト聞、大ニ力ヲ落シテセメテ菩提ヲ申ソ為ニトテ奥州ニ下リ、高館合戦ノ次第討死ノ様子迄郷之者ニ委舖尋テ義経朝臣鈴木兄弟ノ遺跡ヲ申ヒ、其後故有テ参州高橋庄矢並ノ里ニ住スト云、世二三河鈴木ト唱フルハ七郎重善ノ末流ナリ

(『鈴木家系譜』)

ここには、重家物語の担い手の原型的な相貌が期せずして描き出されていよう。系譜は、重家の叔父重善が、二人の甥の討死の様子を聞き、その菩提を申わんとして奥州高館に下り、その討死の様子を尋ね聞き、その遺跡を申つたと記す。残された身内や家来などが実際に遺跡を訪ね、最期の様子を聞いて語るということは、常套的な語り口であった。もちろん、それが史実であったことは知る術もない。しかし、この重善の伝承の背後には、鈴木家を語ろうとする存在が見え隠れするのである。

三州矢作に滞在したという点も興味深い。矢作は義経伝承の一つ『浄瑠璃姫物語』の舞台となった土地である。そうした義経伝承と重善がつなぎ合わさるかのように記されていることも『鈴木

家系譜』が義経伝承をうまく取り込み、家の系譜を代々語っていた節を感じさせる。

鈴木家の者が鈴木重家物語を語つたとする記述は、重家の子である重次、重染にも見ることができよう。

重次

重次志願シテ子々孫々迄拝サセン為、藤白屋敷ニ祠堂ヲ造立シ、中位義経卿、右重家、右重清ヲ安置シ藤白祠ト号ス、

重染

重家、重清ノ遺跡ヲ慕ヒ、奥州へ下リ出家トナリ、三士ノ菩提ヲ長ク申ントテ衣川ノ辺ニ一宇ノ精舎ヲ建立シ、重染寺トシ開山トナル、

(『鈴木家系譜』)

重次は総領として藤白に残り、重家の系譜を担う役割を果たし、重染は奥州衣川に赴き、重染寺を建てて申つた。両者は祠、精舎を建てて亡き父重家を祀る。しかし、それだけが菩提を申うということではなかつたことが窺える。「子々孫々迄拝サセン」、「長ク申」とあることを見ると、そこにはやはり祠、精舎と共に亡き父重家の武勇を語る鈴木重家物語の存在があつただらう。この『鈴木家系譜』には、重次、重染が鈴木重家物語の語り手としていたことを伝える他方で、藤白鈴木家の末裔たちを鈴木重家物語の「語

り手」に位置づけようとする意図が見える。また、藤白だけでなく奥州において語られる鈴木重家物語もまた鈴木家の者が担ったと『鈴木家系譜』はいうのであった。

『鈴木家系譜』によると、藤白鈴木家の末裔たちが鈴木重家物語の担い手として位置づけられていることが明らかとなった。重善、重次、重染の三者があたかも鈴木重家物語の成立に深く関わっていたかのように『鈴木家系譜』は記す。このように、三者が鈴木重家物語の直接の担い手となったと記されている点は見逃ごせないだろう。これらの者たちが本当に鈴木重家物語を語ったかは定かではない。しかし、語り手の位置に藤白鈴木家の者たちが置かれているということが重要な意義を持つのである。鈴木重家物語は、鈴木家の先祖の語りという要素を持つていること、藤白の子孫がその語り手の役を担っていったことによつて「家の文学」だと言える。『鈴木家系譜』は、そうした「家の文学」である鈴木重家物語が、藤白鈴木家の周辺のものによつて成立してきたことを示すものであろう。

現在、藤白鈴木会なるものが存在する。藤白鈴木会は、鈴木家の古文書を発見し、それによる鈴木重家伝承の異説を述べる¹⁵⁾。義経は高館持仏堂に立てこもり自ら火をかけたが、その前に重家を召され、「汝には紀州藤白に父と妻子あり、立ち帰つて孝養をつくせ、我は汝の弟、亀井六郎重清をつれて蝦夷に落ちる」との敵命を受け、この主命には背きがたくやむなくその場を立ち去つた、というものである。また、藤白鈴木会は、生き残つたとされる鈴木

重家やその妻のその後を述べて、鈴木家の展開を示す。それによると、鈴木重家の後裔が秋田、宮城、石川と拠点の紀州藤白を離れて存在し、現在に至るといふ伝承も語られている。真偽の程は誰にもわからない。しかし、それらの伝承がすべて藤白鈴木家から発したとすることに注目すべきである。この藤白鈴木家に原点があるという考えは、鈴木重家物語にも共通するだろう。

鈴木重家物語は、藤白において藤白鈴木家の末裔たちをはじめとする、その周辺の者たちによつて語られた。「藤白」という土地に住む者によつてその物語は管理されたのである。

四―二 熊野修験、熊野比丘尼

「藤白」だけでなく、「奥州」という土地における鈴木重家物語もあつたと考える。義経の奥州下りとその悲劇的な最期に彩られる奥州の地に根差して鈴木重家物語は語られた。柳田國男が指摘するように、義経伝承は基本的に奥州の在地性を持つ。その奥州で鈴木重家物語を語つたのは藤白鈴木家の末裔たちだけではなかつた。そこには鈴木重家物語を用いて熊野信仰勧請のもとに活動した熊野修験者、熊野比丘尼がいたと見るべきである。

鈴木重家物語には、すでに見たように物語中に熊野の本地譚が含まれている。鈴木重家が弟亀井重清に渡す腹巻の由来譚がそれに当たる。熊野信仰勧請の意図を持つ者が、こうした鈴木重家物語を語り、熊野信仰を広めようとしたことは考え得ることである。

地誌類において、鈴木家による熊野権現勧請の伝承は次のように記されている。

十二所権現社
淀橋の南、角管村にあり。祭神紀州熊野権現に同じ。本郷村成願禪寺奉祀の宮なり。社記に云ふ、応永年間、鈴木莊司重邦が後裔、鈴木九郎某なる人ありて、紀州藤代に住めりしが、流落して此中野の地に移り住す。熊野権現は産土神たるにより、宅の邊の丘陵を開きて小祠を営み、尊信深かりし。然るに九郎或時、北總葛西の市に、飼ふ所の瘦馬を賣りて、價一貫文を得たる帰路に臨んで浅草に至り、其得る所の錢のを解きてみるに、悉く大觀錢なり。九郎心裏に思ふ所ありて、即觀音堂に詣で、其錢を寶前に奉り、手を空しうして帰りしが、夫より後、はからざる幸福を得て、其家大に富をなせり。故に応永十年癸亥、社を再興し、更めて十二所の御神を勧請し奉り、田園等若干を附す。数世を歴て後、荒廢におよび、神燈光疎に、祭尊常に闕くといへども、猶感応の速なるを以て、村民恐怖し、遂に享保の頃、官府に訴へて成願寺奉祀の宮とす。しかありしより已降、神供嚴重に、祭祀懈る事なし。九月二十一日を祭祀の辰とす。

(『江戸名所図会』¹⁴)

舊家 鈴木善兵衛

此村の肝煎にて、紀伊國藤代の住人鈴木三郎重家が末裔なり、重家は源義経本國下向の時従來り高館にて討死せり、其頃重家が子父のゆくえを尋んため、修験に身を替へ常光坊と稱し、本國に下りしに父が討死を聞き、此村に止り熊野宮を勧請し代々修験を相続す、然るに重家より八代の孫大壽院が子少納言と云もの、鈴木善左衛門と稱して此村の肝煎となり、子孫相続て今に至りしと云、藤代の鈴木三郎と云者の家へ、今に書翰往復して同姓の好をなすとぞ。

(『新編会津風土記』上田村 舊家¹⁵)

三河寶飯郡佐脇村へ、熊野権現を勧請の時、鈴木、石黒、有井三氏の祖、熊野より御神體の御供いたし候。

(『古老茶話』¹⁶)

このように、藤白鈴木家の末裔によつて熊野信仰は各地へ広がつていったとされる。藤白から各地へ足を運び、熊野神を勧請した。藤白に起源を發していることを伝えている部分からは『鈴木家系譜』と同じ性格であることが見てとれる。しかし、これらがすべて藤白鈴木家の末裔の活動であつたとは思えない。奥州での修験者、比丘尼の活動を捉えていきたい。

宮家準は熊野神社の都道府県別数を挙げる。それによると、全国には三〇七八社の熊野社があり、東北地方には関東、中部に次ぐ五百十もの熊野権現を祀る社が存在したという¹⁷。奥州におけ

る熊野社は、鈴木姓の者が勧進した熊野権現ばかりではもちろんない。その中には、藤原秀衡によつて建てられた平泉中尊寺の鎮守社とする新熊野社もあつた。熊野修験者や熊野比丘尼の奥州への入り込みがここに想起されよう。宮家準は年代別の熊野権現勧請・先達・荘園数を表に表しながら、「南北朝期以降になると、熊野修験、熊野比丘尼、藤白の鈴木氏など遊行の宗教者による勧進が増えてくる」と指摘している⁽³⁸⁾。鈴木家の活動のみでは、こまでの数には達しないだろう。奥州には宮家準が述べているように熊野修験者、熊野比丘尼の姿が存在したと見るべきである。

奥州における修験の中心は羽黒山の存在があるが、『義経記』に熊野山伏の奥州での活動を窺うことができる。

「どこ山伏と問はんずる時はどこ山伏とか言はんずる」「越後國直江の津は北陸道中途にて候へば、それより此方にては羽黒山伏の熊野へ参り、下向するぞと申べき。それより彼方にては、熊野山伏の羽黒に参ると申べき」と申しければ、

（『義経記』巻第七「判官北國落の事」）

この時代羽黒と熊野とで交流があつたことを見ることが出来る。この他にも、平泉の毛越寺・中尊寺の修験が修行道場とした烏帽子嶽山頂に熊野三所権現がまつられ、秋田県男鹿半島の本山・真山は紀州熊野の本宮・新宮になぞらえたものとされており、青森県の岩木山にも熊野の影響が認められている。

『出羽国秋田領風俗問状答』には次のような記録がある。

（一月十六日 宝性寺曼陀羅參

郊外の寺町にある比丘尼寺なり。この日地獄變相の図を掛く。女兒群參す。

（『出羽国秋田領風俗問状答』六郡祭事記⁽³⁹⁾）

奥州出羽国において比丘尼寺があり、熊野比丘尼が活動した。これは秋田市宝性寺で行われていた年中行事「曼陀羅參」の記録とされる。女性や子どもを集め、絵解きを行う熊野比丘尼の姿が記されている。「地獄變相の図」とあるが、これはおそらく熊野信心十界図の類だろう。この他にも、南会津郡田島町宮本の熊野神社、藤生の熊野神社において千一、ごあん比丘尼という熊野比丘尼の活動があつたことを、藤田定興が指摘している⁽⁴⁰⁾。

こうした熊野修験者や熊野比丘尼が奥州で活動を行つていたことを理解した上で、彼らの鈴木重家物語の担い手としての可能性に迫る。鈴木家の支配下、影響下に熊野修験者、熊野比丘尼が存在し得たことを示してみよう。

『紀伊国名所図会』には興味深い記述がある。

中古より聖護院宮、および三宝院御門主御入峯あるたびごと、つねに御入輿あらせたまふこと、実に希代の名家といふべし。

（『紀伊国名所図会』鈴木三郎重家宅）

聖護院とは、京都にある本山修験宗の総本山であり、三宝院とは、真言宗醍醐派の総本山であった。それらの門主が入峯の際に入興したというのである。これを角川源義は「本山派、当山派両流の山伏の主催者は、鈴木の家を「希代の名家」としていて、入峯の行事を行っていた」と指摘し、熊野修験者と鈴木家の関係性を示す。そして、そのように鈴木家という家を称える意味で「熊野語部により語り出され」と述べる。ここでの熊野語部とは熊野修験者を指す。峯とあることから大峰山を想起させられるが、恐らく熊野に入っていく際のことを示すと思われる。鈴木家は修験道の二つ宗派、本山派修験と当山派修験の本所とゆかりを持っていたとし、入峯の際に藤白王子社に参つていったと解釈してよいだろう。

『紀伊続風土記』成立当時（十九世紀前半）新宮における社家は三つに分かれ、衆徒、神官、社僧と号されていた。そして、これらは総じて三方社中と称された。衆徒は「神地の政務を専として雑事に至るまで總て支配」し、「舊僧形にて妻帯せしを南北の頃より兵事を専務として佛家の行ひ」をしていた。神官は「神宮に入り神事を専ら」とし、「終身潔斎」であった。社僧は「禮殿にて本地佛に誦經する事を専」とし、「宗旨なし肉食妻帯」の身の者であったとされる。こうした三方社中に鈴木家の者が拵ががつてゐる。

衆徒七人

石垣主税 石垣雅楽 石垣勘解由 石垣外記 永田

大膳 永田敷馬

鈴木又左衛門

鈴木又左衛門は熊野著姓鈴木氏の本家といふ今断絶す社僧の立光坊大乘坊眞定坊皆分家といふ。

神官

泰地五郎兵衛 泰地上總 泰地左馬之助 泰地左内

宇井大監

宇井要人 宇井大膳 鶴殿右馬之丞 鳥居兵庫之

助

社僧十五人

横山覺泉院 鈴木立光坊 楠東實坊 鈴木大乘坊

鈴木眞定坊

横山大圓坊 横山良泉院 宇井圓隆坊 榎本林昭坊

石垣專勝坊

榎本慶藏坊

神倉兼勤清僧

宇井明乗坊 西東光坊 鈴木常住院 西林廣坊

配下
本願庵主

『紀伊統風土記』()

社僧には鈴木立光坊、鈴木大乗坊、鈴木眞定坊という名が記されているが、これらはすべて修験者であった。また、これは単に一人を示すのではなく、修験者を統括する組織そのものをも示したものである。社僧は「禮殿にて本地佛に誦經する事を専」とし、「宗旨なし肉食妻帯」の身の者をいうと先に述べた通りである。彼らは新宮に属しながらも熊野修験者として本地仏に誦經しつつ、熊野信仰を広めていったと見る。神倉兼勤清僧には鈴木常住院なる名がある。神倉社も兼ねて勤める僧だと思われる。この神倉社は熊野勧請の一役を担うべき本願所であった。ここに勤める者は熊野信仰勧請の活動を行っている修験者に違いないだろう。ここに鈴木家の名があることは、修験者と鈴木家との深い関係を示唆している。配下とされる「本願庵主」とは、新宮における造営の勧進に携わる。この本願庵主と並んで記されていることにも、これらの者が熊野信仰勧請のもとに活動していたことが推測されるよう。

さらに、『紀伊統風土記』、『紀伊国名所図会』によると、比丘尼山というものが藤白王子社のすぐそばにあった。

○比丘尼山

海邊にて村より七町許西福寺の舊跡といふ古熊野妙法山を此地に摸して諸國の比丘尼來り住し故しか呼ぶといふ天正年中退轉す其後中村の念佛堂を此地に移したれと是も亦類廢す

『紀伊統風土記』比丘尼山

比丘尼山 (藤松より北の浜辺に。ここはそのかみ熊野妙法山を移して、諸國比丘尼集會して、越年をしたるといふ。天正年中に荒廢して、その名のみこれり)

『紀伊国名所図会』比丘尼山

熊野妙法山を模して諸國の比丘尼がここに集まつて住んでいた、もしくは年籠りしたとする。熊野妙法山とは、熊野比丘尼の拠点、本願所の一つである。

『紀伊統風土記』には寛文の寺記にとして、次のように記されている。

當山不擇貴賤男女納骸骨於我山建立卒都婆立石塔念佛修善祈無上菩提是諸佛救世之道場也肆往昔先德爰居住多矣諺曰女人號高野故不論僧尼住持自往古例也

『紀伊統風土記』那智山末

貴賤男女を選ばず、骸骨をこの山に納め卒塔婆や石塔を建てて念仏修繕し菩提を申つたとする。そして、「女人高野」と号すとして多数の僧尼がここで居住していたというのである。妙法山が古

くから熊野比丘尼の拠点として存在していた。また、亡者の熊野参りとして、人が死んだときには幽魂が必ずこの山に参詣するという話がここにはあつた。そのような妙法山を模したとあることから、この藤白の比丘尼山も熊野比丘尼の拠点となり、多数の熊野比丘尼が集つたと思われる。

熊野信仰勧請に従事する熊野比丘尼が鈴木家の支配の及ぶ場所に集まつていたことは注目すべき点である。藤白を拠点として熊野神領支配の力を持つた鈴木家。その藤白に集まる熊野比丘尼たち。熊野信仰勧請という同じ想いを抱く両者はつながりを持ち、それぞれの活動を行つていった。その両者をつなぐ要素の一つに鈴木重家物語はあつただろう。徳田和夫は那智参詣曼陀羅ホノル美術館本の巻末に、当初の所蔵者あるいは制作発願者であろう「鈴木庄司」の印記を見つけ、那智参詣曼陀羅はこうした熊野神を齎き、その縁起物語を管理する家筋が持ち伝えるものであつたと述べている¹⁾。絵解いて各地を巡つた熊野比丘尼と鈴木家のつながりはこうした部分にも見られるのであつた。

五 おわりに

鈴木重家物語の存在、その担い手を示すことで、『義経記』成立考の一部を担うことができたと考える。『義経記』編集者は、藤白鈴木家の末裔たち、熊野修験者や熊野比丘尼が語る鈴木重家物語も『義経記』成立過程の中で知り得ていた。そして、その上で義

経と共に平家と戦つたとする語りや、義経のもとへと向かう奥州への途中に捕縛されるという語りは採用せずに、衣川合戦の直前に義経のもとに辿りつき、共に死出の旅路を行くという語りのみを『義経記』に取り込んだのだろう。

鈴木重家物語と佐藤忠信物語、静物語とを構造比較することで、鈴木重家物語が二つの物語の影響で成長していっただろうことが明らかとなつた。また、類似する物語を並べて、鈴木重家物語ではなく二つの物語の方を取り上げたために、鈴木重家物語の『義経記』への取り込みが一部分となつたことも窺うことができた。『義経記』の成立を論じていく上で、各伝承説話の相互関係を見過ごしてはいけない。『義経記』を編集していく中で、類似する物語が並ぶことが編集者にとって危惧されたことは容易に考えられる。つまり、『義経記』の成立考を深めていくには、まず『義経記』に内在する義経並びに義経郎等伝承の存在を確かに捉え、その存在がどのような者に管理されたのかをつかむことが必要であり、そこからさらに、それらの物語を全て並べて比較し、相互関係の中で、一つひとつがどのように『義経記』に取り込まれているのかを解き明かしていかなければならないのである。義経と義経郎等たちの物語成立考を追究、比較分析していくことが、『義経記』成立考を論じることにつながっていくだろう。

この提唱こそが本論文を『義経記』成立考の序説とするゆえんである。

- (1) 『義経記成長の時代』(『雪国の春』 角川書店 一九五六年七月)
- (2) 『義経傳説と文学』(島津久基 大字堂書店 一九七七年五月)
- (3) 『義経記』の成立』(『中世文学と民俗』 角川書店 一九六〇年四月、『語り物文芸の発生』 東京堂出版 一九七五年十月)
- (4) 『白河印地と兵法―義経記覚書―』(『国語国文』二十七卷十一号 一九五八年十一月、日本古典文学大系『義経記』解説(岩波書店 一九五九年五月)など。
- (5) 『鬼一法眼譚の背景―その兵法習得の問題をめぐって―』(『義経記・曾我物語』 日本文学研究大成 国書刊行会 一九九三年五月)
- (6) 『義経記』(日本古典文学大系 岩波書店 一九五九年五月以下、『義経記』の引用は同書によるものとする。
- (7) 『吾妻鏡 前篇』(国史大系第三十二卷 吉川弘文館 一九六四年七月)
- (8) 『玉葉』全三卷(名著刊行会 一九七一年十二月を用いた。
- (9) 『愚管抄』(日本古典文学大系 岩波書店 一九六七年一月)を用いた。
- (10) 本稿においては、『平家物語』諸本として、屋代本、百二十句本、寛一本、延慶本、長門本、南都本、中院本、源平盛衰記を用いて確認した。『屋代本平家物語』(角川書店 一九六六年三月)、『平家物語百二十句本』(思文閣 一九七三年十月)、『平家物語』(新日本古典文学大系、岩波書店 一九九三年十月)、『延慶本平家物語』(勉誠社 一九三五年二月)、『平家物語長門本』(名著刊行会 一九七四年十月)、『南都本南都異本平家物語』(汲古書院、一九七一年十月)、『中院本平家物語』(三弥井書店、二〇一一年三月)、『新訂源平盛衰記』(新人物往来社 一九八八年八月)
- (11) 『謡曲叢書 第一卷』(博文館 一九一四年四月)
- (12) 注一に同じ。
- (13) 『舞の本』(新日本古典文学大系 岩波書店 一九九四年七月)
- (14) 『狂言記』(日本文学大系第二十二卷 国民図書株式会社 一九二六年三月)
- (15) 『異本義経記』(佛教大学研究紀要五十七号 一九七三年三月)
- (16) 『書陵部紀要』第三十五号(宮内庁書陵部 一九八四年二月)
- (17) 『紀伊国名所図会』(『日本名所風俗図絵』十二卷) 角川書店一九八五年八月以下、『紀伊国名所図会』の引用は同書によるものとする。
- (18) 稿者卒業論文『英雄物語の生成―『義経記』における吉野物語の展開―』を参照。
- (19) 注三に同じ。
- (20) 『義経記の一考察―判官物舞曲との交渉―』(『軍記物とその周辺』早稲田大学出版部 一九六九年三月)
- (21) 『鈴木三郎異伝の生成と展開』(『中世軍記の展望』 和泉書店 二〇〇六年七月)
- (22) 『赤木文庫本 義経物語』(貴重古典籍叢刊十 角川書店 一九七四年三月)
- (23) 『神道大系 神社編四十三 熊野三山』(精興社 一九八九年三月)

- 以下、「熊野山略記」の引用は同書によるものとする。
- (24) 『新訂 寛政重修諸家譜 第十七』（統群書類聚完成会 一九六五年）以下、『寛政重修諸家譜』の引用は同書によるものとする。
- (25) 『紀伊統風土記』（和歌山縣神職取締所 一九二一年五月）以下、『紀伊統風土記』の引用は同書によるものとする。
- (26) 『鈴木家文書』（海南市史 第三卷 史料編Ⅰ）一九七九年三月以下、『鈴木家系譜』の引用は同書によるものとする。
- (27) 『新訂 吉記 本文編Ⅰ』（日本史史料叢刊三 和泉書院 二〇〇二年二月）
- (28) 『後鳥羽院熊野御幸記』（『群書類聚』訂正三版 第十八輯 統群書類聚完成会 一九八七年三月）以下、『後鳥羽院熊野御幸記』の引用は同書によるものとする。
- (29) 『神道大系 文学編五 参詣記』（精興社 一九八四年三月）以下、『修明門院熊野御幸記』の引用は同書によるものとする。
- (30) 注二三に同じ。
- (31) 『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（新日本古典文学大系 岩波書店 一九九三年六月）以下、『梁塵秘抄』の引用は同書によるものとする。
- (32) 注二三に同じ。
- (33) シンボジウム『熊野古道（藤白）を語る』（藤白鈴木会 二〇〇二年一月）
- (34) 『江戸名所図会』（大日本名所図会刊行会 一九一八年二月）
- (35) 『新編会津風土記』卷三（大日本地誌大系二十七 雄山閣 一九六二年）
- (36) 『古老茶話』（『日本隨筆大成』卷六 吉川弘文館 一九二七年）
- (37) 『熊野修験』 吉川弘文館 一九九二年九月
- (38) 注三七に同じ。
- (39) 『日本庶民生活史料集成 第九卷 風俗』（三一書房 一九六九年九月）
- (40) 『会津・磐城の修験伝承―熊野比丘尼と懸仏―（山岳宗教史研究叢書十六、修験道の伝承文化） 五来重 一九八二年十二月）
- (41) 『名取の老女、和泉式部、御衰殿―女性の参詣説話と流離苦難の物語―』（熊野 その信仰と文学・美術・自然） 国文学解釈と鑑賞別冊 二〇〇七年一月）

（大阪府立守口支援学校教諭）